

## 保育事例紹介～「科学する心」を育てる～

やってみる～1歳児～／社会福祉法人境暁福祉会 幼保連携型認定こども園あかつき保育園（大阪府）

1歳児が身近なものに関わる姿に注目したことはありますか？

今回の事例は、一人の子どもが、水やスポンジに関わる姿に保育者が寄り添い、1歳児なりの気づきや、不思議との出会いを見取り、丁寧に受け止めている事例です。言葉で表現することの少ない1歳児の言動を注視することで、保育者の関わりや環境について何が大切かを読み取ることに繋がっています。



### ○「あれー出てきた？」／1歳児

#### ✿ 子どもの姿、保育者の気づき・関わり

- 7月末、子どもたちは、水と関わって遊ぶことを楽しむ様子が見られた。さらに楽しめるように、環境の一つとして、大きさの違うスポンジをいつでも使えるように出しておいた。
- Aちゃんは、大きいスポンジに興味をもった様子で、触り始める。何回も、スポンジを押す動きをする。

##### 保育者の気づき・関わり

「なんだろう？」と、興味をもって、何回も押してスポンジが凹む感触や元に戻る様子を確認しているのだと受け取り、保育者は、Aちゃんの姿をそばで見守った。



- Aちゃんは次に、小さいスポンジを見つけて手に持った。そして、水の入った容器やスポンジなどで遊ぶ友達の様子を、近くで見ている。
- しばらくすると、大きいスポンジに小さいスポンジを載せ「おっ」と、言う。また、大きいスポンジの上で小さいスポンジを両手で絞るような動きをした。Aちゃんは、何回も繰り返していた。

##### 保育者の気づき・関わり

スポンジを載せる、水を絞るなどを繰り返し、Aちゃんなりに試しているように（気づいたことをやってみる）感じた。絞る様子を見て「ギュってしたら、水が出てきたね」などと受け止める言葉をかける。Aちゃんは、ほとんど言葉を発しないが、夢中になって繰り返していた。

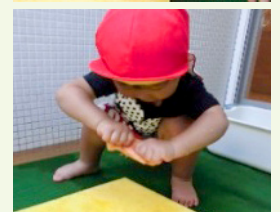


- Aちゃんは、しばらく、スポンジを触ったり押したりしているうちに、大きなスポンジをギュッと押さえると水が出てくることに気づき、何回も押さえる。そして、水が出てくると、「あー」と言ったり、「ギュッ」と言って強く押さえたりを繰り返していた。

##### 保育者の気づき・関わり



Aちゃんは、大きいスポンジを押し込むと、ジワジワと水が出てくることに気づいたようだった。不思議に感じたのか？「あー」と、声を出していた。それが、面白かったのか、さらに力を入れて押し込んでいた。



- Aちゃんは、「せんせー」、「ギュー」と言って、保育者の手を引っ張る。保育者が、Aちゃんと同じ動きをして一緒にスポンジを押すと、さらにたくさんの水が手の周りが出てきた。Aちゃんは、それが面白かったのか、一緒に繰り返し押しして遊んだ。そのうち、水は、染み出てこなくなった。



#### 保育者の気づき・関わり

スポンジを押したら水が出てくる不思議さを、Aちゃんは、「保育者に一緒にやってほしい、共感してほしい」のだろうと感じ、保育者は同じ動きをして受け止めた。

- Aちゃんは、水が出てこなくなったスポンジを持って、浮かせた。保育者も、スポンジを浮かせてみた。Aちゃんは、何度もめくって、「ない」と言う。保育者も、「水どこ行ったのかな…」 「ないねー」などと共感した。

#### 保育者の気づき・関わり

Aちゃんは、スポンジを持ち上げ、めくってみると「ある」と思っていた水がないことに、気がついて驚いた様子であったので、保育者も同じ言葉で受け止め共感した。

- 次に、Aちゃんは、周りに落ちていた他の小さなスポンジ（友達が遊んで置いてあったものなど）も持ち上げ始めて、「ない」と言う。保育者は、「どこ行ったかな？」と、言うと、Aちゃんは、床板と床板の間の隙間を指している。そして、いろいろな所にあったスポンジをめくって歩き、水があるかないかを確認していた。



- そのうち、たつぷりと水が入った容器を見つけ、「あったー」と言いながらバシャバシャと、水に触れて喜んでた。その後、たつぷり水を含んだ大きなスポンジに気づき、「いっぱい」と言いながら両手で押さえ、水が出てくる感触を味わっていた。



#### 保育者の気づき・関わり

Aちゃんは、水が隙間に入ってこの下に水があると予想したのではないだろうか？水が貯まっている容器を見つけたこと、思い切り触れたことで、水が確かにあることを実感し、ホッと喜びを感じたように思った。また、スポンジは、見た感じで、たつぷり水が入っていることが分かったのだと思う。そして、「いっぱい」と表現した。保育者は、Aちゃんの傍らで、「あったー」や「いっぱい」に共感した。



## ✦ 考察

- Aちゃんは、スポンジを絞ったり、押さえたり、水を探したりなど、自ら関わりいろいろな行為を繰り返し、意欲的に遊んだ。保育者は、まずは、子どもがどのように関わるのかを声をかけずに見守った。その安心感の中で、1歳児なりに、感じたり気づいたりしたことをやってみて、スポンジから水が出てくることや水がなくなること不思議さや面白さを感じ、興味をもったのではないかと感じた。
- スポンジをめくると水が「ない」ことへの気づきや、保育者の「どこ行ったのかな？」との受け止めが、「水がある、ない」に関心をもつことにつながったのではないかと、また、スポンジなどをどかして水があるかないかを探すことも面白くなり、繰り返していたのではないかとと思われる。
- 最後の容器の水は、バシャバシャと思い切り関わることで、水の存在を感じ、たつぷりの水がある中に手を入れる感触を楽しんでいたのではないかとと思われる。
- 「あ」と気づき、「あれ？」 「どこいった？」 「ない」 「いっぱい」などの不思議に出合ったことが、繰り返し試し、遊ぶ心地よさにつながったことが分かった。面白さを感じ繰り返し遊びたくなるような環境が重要であると考えられる。
- 子どもが繰り返し楽しめるように、保育者は傍らで見守り、子どもの言動を丁寧に受け止め、共感していったことが、子どもの興味を広げて、次の意欲につながった。